番組アーカイブ活用と新たな展開2019
大学・放送局と放送ライブラリーの取組の報告

記録

2019 年 11 月 9 日（土）

目次

Ⅰ. 開催概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ. 登壇者プロフィール・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅲ. 成果報告

①駿河台大学メディア情報学部　今村庸一　教授・・・・・・・・3

②早稲田大学文学学術院　鳥羽耕史　教授・・・・・・・・・・・・4

③椙山女学園大学文化情報学部　太田智己　講師・・・・・・・5

④東北放送報道制作局報道部　野口　剛　ニュースデスク・・・・6

Ⅳ. パネルディスカッション・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

Ⅴ. 質疑応答・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０

Ⅰ．開催概要

番組アーカイブ活用と新たな展開 2019
大学・放送局と放送ライブラリーの取組の報告

放送ライブラリーの公開番組を大学の授業や公共施設で活用するサービスを利用した大学教員、番組上映会を行った放送局を招き、事例報告とパネルディスカッションを行った。

■日時　2019 年 11 月 9 日（土）14:00～17:00

■会場　上智大学　四谷キャンパス　６号館 307 教室

第１部（14:00～15:35）

・開会挨拶　音　好宏（上智大学 教授）
・番組利活用事業の説明　鈴木　貴尚（放送番組センター 副主幹）
・事例報告
　① 今村 庸一（駿河台大学 教授）
　② 鳥羽 耕史（早稲田大学 教授）
　③ 太田 智己（椙山女学園大学 講師）
　④ 野口　剛（東北放送 ニュースデスク）

第２部（15:50～17:00）

・パネルディスカッション
　① パネラー　今村 庸一（駿河台大学 教授）
　② 〃　鳥羽 耕史（早稲田大学 教授）
　③ 〃　太田 智己（椙山女学園大学 講師）
　④ 〃　野口　剛（東北放送 ニュースデスク）
　⑤ 進行役　音　好宏（上智大学 教授）
・質疑応答

■主催　公益財団法人 放送番組センター
　上智大学メディア・ジャーナリズム研究所

Ⅱ．登壇者プロフィール

	今村　庸一（いまむら　よういち） 駿河台大学メディア情報学部　教授、文化情報学研究所　所長 所属学会等 日本マス・コミュニケーション学会、日本国際政治学会、日本放送作家協会、放送批評懇談会、日本ペンクラブ オフィス・トゥー・ワン所属放送作家（1984～94）
	鳥羽　耕史（とば　こうじ） 早稲田大学文学学術院　教授 所属学会等 日本近代文学会、日本文学協会、昭和文学会、早稲田大学国文学会
	太田　智己（おおた　ともき） 椙山女学園大学文化情報学部メディア情報学科　講師 所属学会等 美学会など
	野口　剛（のぐち　つよし） 東北放送報道制作局報道部　ニュースデスク 制作した主な番組 「イチゴと妻と　～失われた集落　気仙沼　杉ノ下　遺族の4年～」（2015）、「あの子どもたちは今　～東日本大震災7年目の春～」（2017）、「再会　～震災8年　故郷　杉ノ下に生きる～」（2019）
	音　好宏（おと　よしひろ） 上智大学　文学部　新聞学科　教授 所属学会等 社会情報学会、放送批評懇談会、日本平和学会、日本社会学会、情報通信学会、日本マス・コミュニケーション学会

Ⅲ. 成果報告①

駿河台大学
メディア情報学部

今村 庸一 教授

（駿河台大学 文化情報学研究所 所長）

■番組を利用した授業

メディア情報学部『映像メディア論』(2016 年度)

■利用した番組

タイトル	放送局	ジャンル	放送日
幾歳経るとも要心あれ ―2011. 03. 11. 東日本大震災―	IBC岩手放送	ドキュメンタリー	2011.05.28
金曜プレステージ 自衛隊だけが撮った0311 ―そこにある命を救いたい―	フジテレビジョン	ドキュメンタリー	2012.03.09

■利用形式

講義中の上映

■報告要旨

(1)番組を利用した理由

2016 年の春学期に放送ライブラリーの番組を使った。この年は東日本大震災から５年目だったこともあり「災害報道と映像」というテーマで震災を振り返る予定でいた。偶然にも同年４月に熊本で地震が起き、学生もリアルタイムで刻々と状況を伝えるテレビ報道に関心が高かった。今まさに起こっていることをテレビで見る経験は誰もがしているが、過去を遡り、自分が体験したことや生まれる前の出来事を映像で検証する作業を学ばせたかった。

(2)学生の反応と効果

学生からは、「大変貴重な映像が見られてよかった」「こういう視点でドキュメンタリーが作られていることを初めて知った」などの声や、授業時間の都合で全編を上映できなかったため、「最後まで見たかった」という反応もあり、大変好評であった。また、ローカル放送でしか見ることのできない映像もあり、「色んな角度から見なければいけないことがよくわかった」という声もあった。作り手は何を考えているか、ローカルから見るとどう見えるかなど、立ち位置によって価値観が 180 度変わることを映像で学ばせる目的があったが、番組を見ることでおおむね達成できたと感じている。

(3)映像アーカイブの持つ課題

映像資料の需要は高く、重要性も認識されているが、権利関係や報道の自由、プライバシーなど、さまざまな問題が絡み合っており、これらを整理して利用しなければいけない現状がある。国際的にも模索されているだろうが、映像資料を学問で利用する場合の基準や制限、範囲を成文化していく必要がある。

映像アーカイブでは、実物である記録媒体をどこに置き、どのように利用するかといった課題もある。1 か所で全ての媒体を保存しておくことは不可能であり、専門領域ごとにどこが管理しているかといった情報を整備し、リンクさせる必要がある。また、機材の進歩により古い媒体に記録された映像を再生できなくなることも多々ある。

さまざまな問題があるが、どういう思想のもとで映像を残していくか深く広く考えていく必要がある。

Ⅲ. 成果報告②

早稲田大学
文学学術院

鳥羽 耕史 教授

■番組を利用した授業

文化構想学部 文芸ジャーナリズム論系『日本近代文学とマスメディア2』(2018 年度)

■利用した番組

タイトル	放送局	ジャンル	放送日
日本の日蝕	ＮＨＫ	ドラマ	1959.10.09
東芝日曜劇場　虫は死ね	北海道放送	ドラマ	1963.11.10
棒になった男	文化放送	ドラマ	1957.11.29
ミュージカルコメディーこじきの歌	ＣＢＣラジオ	芸能・バラエティー	1958.04.12
放送劇　吼えろ	朝日放送ラジオ	ドラマ	1962.11.18
チャンピオン	ＲＫＢ毎日放送	ドラマ	1963.04.21
近鉄金曜劇場　目撃者	ＲＫＢ毎日放送	ドラマ	1964.11.27

■利用形式

講義中の上映、予習・復習用の個別視聴

■報告要旨

(1)番組を利用した理由

安部公房作のラジオドラマ及びテレビドラマを利用した。安部公房は 20 世紀のメディア革命の時代を生きた作家で、小説だけでなく演劇や映画、写真など多岐に渡った活動をしているが、それらの中で最も新しいメディアであるテレビとラジオに焦点を絞って内容を検討する授業を行った。最近はアダプテーションが文学研究の中で一つの流行りになっていて、演劇化や映像化された作品を小説やテクストと比較する研究が盛んに行われている。今回の授業ではドラマを読み解く作業を通じ、既存の文学観に囚われないアプローチで文学研究の基礎を身に着けることを目指した。

(2)授業の進め方

『日本近代文学とマスメディア』と掲げられた授業であり、マスメディアとの関わりについての内容を要請されていた中で放送ライブラリーの番組を利用できることを知った。シラバスを作る 12 月頃に翌年秋学期での利用を申し込んだ。授業が始まるまでの間に権利処理や通信テストなどを済ませるスケジュールを組んで申し込んだところ、非常にスムーズに使うことができた。具体的には、まずオリエンテーションをして解説したあとで、年代順に視聴していく構成にした。30 分以内の番組が多かったので、授業時間中に視聴後、ディスカッションし、まとめることをした。また、指定のコンピュータルームで予習、復習のために視聴できる形式にした。放送ライブラリーにない作品も使用したが、これらは自分で調達した音源やシナリオなどを使った。

(3)利用してみて

作品制作にあたって安部が考えていたことなどの話をしながら作品を視聴し、文字を読んでいるだけではわからない部分、例えば、俳優さんの演技や当時の時代背景などが含まれている作品を視聴させることができ、非常にメリットがあったと思う。

Ⅲ. 成果報告③

椙山女学園大学
文化情報学部

太田 智己 講師

■番組を利用した授業

文化情報学部 メディア情報学科『メディア情報分析』『メディア文化論』(2019 年度)

■利用した番組

シリーズ名	放送局	ジャンル	放送日
NHKスペシャル ドキュメント湾岸戦争・開戦から10日	NHK	ドキュメンタリー	1991.01.26
NHKスペシャル 湾岸戦争・43日の全記録	NHK	ドキュメンタリー	1991.03.03
NHKスペシャル タイス夫妻の戦争 アメリカ兵捕虜家族の記録	NHK	ドキュメンタリー	1991.03.10
きょうの料理50年 時代を映す懐かしの100レシピ	NHK	実用	2007.03.21

■利用形式

講義中の上映

■報告要旨

(1)授業のテーマ

『メディア情報分析』では次の二つを主なテーマとした。一つ目が映像ドキュメンタリー作品を観賞するということ、二つ目がカメラをカメラで撮る行為に注目することである。質の高い作品を使用して学生に興味を持たせて、いくつかのメディアから発信される情報を相対化する視点を持ってもらえるように授業を進行できないかと考えた。それを映像ドキュメンタリー作品とつなげ、今回は『タイス夫妻の戦争』を使用した

(2)授業の進め方と効果

番組の他に２本の映画を合わせて使用し、それぞれ最低２回鑑賞した。特に『タイス夫妻の戦争』は３回鑑賞し、都度レポートを提出させてから模範解答を解説し、ヒントを出してから次の鑑賞をした。解説の中では、説明に加えて、雑誌に掲載された制作者のインタビュー記事を配布したり、他の作品と共通する問題点を指摘するなどもした。学生は当初、登場人物に感情的に反応し、人間以外のモチーフや背景には目が向かない傾向があった。全てのカットに意味があると示唆すると、挿入される映像に人物の心境が投影されていることに気付くようになっていった。最後までモチベーションを途切らせることなく、うまく見てもらえたと思う。

(3)放送番組を授業で利用すること

地方で文化を学ぶにあたり、大学は重要な拠点となる。テレビ番組は、地方在住の学生にとってまだまだ存在感を持つメディアで、教材としても親近感がある。しかし教員個人がそれらを収集するには限界があり、専門外のジャンルにまで気を配るのは難しい。充実したアーカイブが利用できるのはありがたい。

Ⅲ. 成果報告④

東北放送株式会社
報道制作局報道部

野口 剛 ニュースデスク

■番組を利用した上映会

～NHK・民放 番組上映会2019～ テレビが伝える東日本大震災

▽NHK仙台放送局、在仙の民放テレビ局（東北放送・仙台放送・宮城テレビ放送・東日本放送）による、東日本大震災関連番組の合同上映会。会期＝2019 年 3 月 22 日～24 日 会場＝NHK仙台放送局 定禅寺メディアステーション

■上映した番組

タイトル	放送局	ジャンル	放送日
ウォッチン！プラスSP 海風に舞う 石巻・十三浜 神楽とともに生きる人々	東北放送	ドキュメンタリー	2015.06.06
TBC報道特別番組 復興って何ですか ～震災6年 住宅再建後の戸惑い～	東北放送	ドキュメンタリー	2017.03.15
TBC報道特別番組 故郷を消さない ～硯のまちで描く未来～	東北放送	ドキュメンタリー	2018.03.17
あの日の校庭に誓って ～大川小学校 遺族の日々～	仙台放送	ドキュメンタリー	2014.08.23
スーパーニューススペシャル 僕のミライ ～青い鯉のぼり・健人の夏～	仙台放送	ドキュメンタリー	2014.11.03
ミヤギテレビ報道特別番組 いつも心に青空を 我ら社会人応援団	宮城テレビ放送	ドキュメンタリー	2014.08.24
ミヤギテレビ報道特別番組 震災はじまりのごはん ～あの日、何を食べましたか～	宮城テレビ放送	ドキュメンタリー	2015.12.30
ミヤギテレビ報道特別番組 震災2000日 被災地医療の今 復活 石巻市立病院	宮城テレビ放送	ドキュメンタリー	2016.09.10
テレメンタリー2011 “3. 11”を忘れない3 津波を撮ったカメラマン ～生と死を見つめた49日間～	東日本放送	ドキュメンタリー	2011.06.08
ほっとネットとうほく 海と祭りと俺たちと	東日本放送	ドキュメンタリー	2013.02.16
テレメンタリー2013 “3. 11”を忘れない38 悲劇の幼稚園バス ～なぜ、わが子が犠牲に～	東日本放送	ドキュメンタリー	2013.10.09
ほっとネットとうほく アユが教えてくれたこと	東日本放送	ドキュメンタリー	2013.12.30
テレメンタリー2014 “3. 11”を忘れない44 三陸カキ 真の復興に挑む	東日本放送	ドキュメンタリー	2014.02.05

※横浜から送信した番組は民放の番組のみ。

■利用形式

2スクリーンでの上映 （4K8K定禅寺シアター＝200 席、3．11シアター＝48 席）

■報告要旨

(1)番組上映会

今年３月に開かれた「ＮＨＫ、民放番組上映会２０１９」は一般の方々に東日本大震災のドキュメンタリー番組を見てもらうイベントであった。その中でトークセッションがあり、私もパネリストの一人として参加した。ＮＨＫと仙台にある民放４局の記者とディレクターが震災の課題や、取材上の悩みなどを話し合った。

３日間で 17 本の震災関連番組を上映し、参加者からは「放送局が思いを１つにした試みは素晴らしい」「報道に携わる人の思いや悩みを知り、考えさせられた」等の意見があり、高い評価を得られた。トークセッションの会場はほぼ満席で、風化していると言われがちだが震災報道への関心は今でも高く、まだまだ続けなければいけないと実感し、震災に関する番組を制作することが、自局の存在感を高めると感じた。また、関心をより高めていく効果もあると感じ、非常に意義のある上映会となったと思う。権利関係が複雑なドキュメンタリー番組の二次利用には障壁も多いが、放送番組センターで権利処理できるのであれば上映会を開催し易くなると感じた。

(2)番組をアーカイブすることとは

番組をアーカイブすることはどういうことであるかというと、まずはどんな災害であったのかを記録し、伝える、ということであると考えた。気仙沼市には非常に大きな津波がきた。9 年が経ち、忘れている人も少なからずいるのが現実だと思う。津波がどのようなものかを映像に克明に記録されたのは東日本大震災が初めてだろう。どのように悲惨な災害で、どのように復興をしていくかを記録することが意義の一つであると思う。

そして、事実をより多くの人に知ってもらう意義もあるだろう。私たち民間放送局は、地上波で番組を見てもらうことが一番の目的ではあるが、番組を見られなかった方、そのような番組があることすら知らなかった方々にも番組を見てもらい、いったい何が起きたのか知ってほしい。番組は、映像、インタビュー、ナレーションと非常に複合的で、制作当時の時代背景が雰囲気として色濃く感じ取れる。例えば 2011 年当時の番組では、スマホを使っている人はほとんどいなかったなど、些細な部分までわかる。そして震災５年、６年、７年のタイミングでできた番組を見ることで、当時の課題を検証して議論し、次の災害に向けて教訓を繋げていくことができると思う。

【上映会の様子】

Ⅳ. パネルディスカッション

パネリスト

今村 庸一（駿河台大学 教授）

鳥羽 耕史（早稲田大学 教授）

太田 智己（梅山女学園大学 講師）

野口　 剛（東北放送 ニュースデスク）

進行役

音　 好宏（上智大学 教授）

■発言要旨

アーカイブされている番組を授業に取り入れること

今村：社会や時代を多角的に分析する際にアーカイブは必須。番組は、映像、音声、編集効果など様々な表現様式を含んでおり、例えば“絶望”という感情の表現でも、10 年前と現在では方法が異なっている。技術の進歩や時代の変遷と共に表現がどう変化したのかも、アーカイブを使って分析できる。過去の資料を次世代に伝えていくためにも、アーカイブ資源をますます充実させていく必要がある。

鳥羽：安部のオリジナルは１つでも、複数のディレクターの手で新たな作品が生まれ、文学研究も広がりをみせる。シンプルで寓話的な短編小説は、テレビ版では和田勉の緊張感溢れる演出で、リアリティのあるドラマとなった。それぞれのメディア特性に合わせた展開が研究の幅を広げた。

太田：ビジュアルカルチャーは読むものではなく見るもので、見るときはアニメでもドラマでも１回だけではなく、２回以上見るように学生に言っている。そういった中で番組を鑑賞させ、思っていたより真面目に集中して視聴してくれた。「こういうドキュメンタリー作品は見たことがなかった」などの反応があり、これまでに研究したことのない研究をしている学生を見て、こういう体験が必要だろうということがわかってきた。

番組上映会について

音　：放送番組は１回放送されると消えてしまうが、上映会で改めて視聴する機会を設けた。それはすごく大きいことだと思う。私も１日参加したが、たくさんの人たちが視聴している様子を見て、自分たちの地域をテレビで確認する、という熱い雰囲気を感じた。

野口：長い時間をかけて番組を制作するが、放送は一瞬。テレビはそういうメディアと認識しているが、もったいないと思う部分もある。アーカイブという形で色々な人に見てもらえるのは制作者として嬉しい。震災は、教訓を伝え続けていくことに意味がある。ローカル局として地元の映像を継承し、後に教材として保存・利用していくためにも、今後はさらに権利処理やアーカイブについて議論していくべきだと思う。

作って学ぶこと

音　：番組を鑑賞して学ぶことと、作って学ぶことの関係性についてはどう考えているか。

今村：本学ではプロのディレクターが来て、実習や演習で映像を制作する授業がある。しかし、実習や制作だけではいけない。大学生だからこそ、メディアの基本的な知識、歴史、政治との関係などを学ぶ必要がある。放送されるとはどういうことか学ばせるうえで、ライブラリーの活用は非常に重要であり、制作者には責任が伴うことを視聴者の立場から理解することは難しいので、メディア関係の大学でプロを養成する仕組みが必要だと思っている。

音　：文学や美学の領域では、作家が生まれる過程や研究の中でアーカイブはどのような位置づけになるか。

鳥羽：特に 50～60 年代の芸術祭のための番組では、作家の書いたシナリオで番組が作られることが多かった。小説とは異なる生成のされ方を見ることは一種の流行りになっていて、研究として今のメディア状況に引きつけながら見ていくことがある。今回の授業ではメディアに関心を持っている学生が多く、メディアが自主規制や忖度をしている現在と比べ、今では放送できないような番組が作られていたことに驚く声があった。

太田：現任校ではテレビ制作の授業があり、前任校は芸術大学であったので、私は作り手を身近に感じているが、多くの人は鑑賞者にしかならない。その多くの人たちも、きちんと作品を鑑賞するかといえば、見てない人や、作品をきちんと解釈しないで鑑賞する人がいて、クレームをつける事態が起こっている。そういった中で作り手のことを考えながら鑑賞して分析できる教育をするためにもアーカイブは大変ありがたいと思う。

映像アーカイブの課題

今村：今の学生にとって、“番組”はスマホで見る多くの情報の中の１つに過ぎない。単に保存するのではなく、デジタルデバイスと親和性のある環境作りが大切だ。研究面で考えると、アーカイブやライブラリーは研究目的のためのデータベースでもあるという意識が重要である。また、日本では図書館や博物館などが縦割りになっているが、フランスなどではミュージアム、ライブラリー、アーカイブスを合わせてＭＬＡ研究と言い、一緒に専門家を養う動きがある。日本でも横断的な専門家を養成することが必要だろう。

鳥羽：50～60 年代の番組の多くは残っておらず、シナリオや資料が散逸して総体的に研究する体制になっていない。埋もれている番組や資料をどうやって遡及的に発掘し、収集していくかが課題だ。日本では新しく大量の資料が発見されても、収蔵庫の容量の問題で受け入れに消極的な機関が非常に多い。現在、戦後日本の資料がアメリカの大学に買われ、日本で見られないものが増えている。

太田：それほど古くない 90 年代の番組であっても、教員個人では入手できない場合がある。また、利用するにあたっての権利処理では、どういったことが必要なのかが分かれば研究者側として、いろいろ考えられる。

野口：被災者の方々の証言は後世に伝えていくべきだと強く思っている。取材者としては、いい取材をすることが何より大切だ。取材する際には、取材のお願いに加えて、この震災を記録したい、とお願いしている。すると取材先の方々も、少し前向きに答えてくれることもあった。そういう思いで制作した番組をアーカイブしていくことは、非常に大事だと思う。そのために権利関係の課題はこれから議論をしていくべき大事な論点の一つだ。

音　：欧米では映像アーカイブ自体が文化政策の拠点として認識され、外交や国際政治での有効なカードとしても注目されている。歴史を記録し続けるアーカイブそのものが有力な装置であり、貴重な財産だという意識を広めていくことが必要だ。

Ⅴ．質疑応答

○[質問]放送番組センターではどのような基準で番組を収集しているのか。また、収集するときは大学教員の要望を聞いてもらえるのか。（大学教授　元 新聞記者）

○[回答]
放送番組センター：放送番組収集基準に基づいて事務局で選定し、加えて有識者から推薦された番組を対象としている。
この過程から漏れた番組は、次の年度以降で遡って収集対象にすることとしている。

○[質問]報道写真として公開できなかった震災の写真などはアーカイブし、時を経てから歴史資料として公開する意義があると思うがどのように考えているか。（大学教授　元 新聞記者）

○[回答]
音　：取材した素材をどのように公開するかは各放送事業者の編集権に関わっていて、基準はそれぞれにある。また、放送法に基づき、番組記録保存所が用意されている。民放連にメインがあり、各放送局にある。フランスなどと異なり、一か所で保存していないが、これは日本における表現の自由に対する考え方の一つだと思っている。

○[質問]私は宮城県出身で東日本大震災は常に頭の中にあり、大学では研究対象にもしている。番組上映会には参加できなかったが、参加者の年齢層はどうだったか。（学生）

○[回答]
野口：会場のＮＨＫ仙台放送局は街中にあって気軽に入れる場所で、子供連れの方、学生、ご年配の方もおられ、非常に幅広い年代の方がいた。震災報道への関心は非常に高いと思った。

【セミナー当日の様子】